

<p>事務局 委員長</p>	<p>[開会] 遅い時間にもかかわらず出席いただき感謝する。今回も忌憚のない意見をいただきたい。</p>
<p>事務局 委員長</p>	<p>[組織改編・人事異動について説明] 続いて、次第 2「本日の検討内容」について事務局より説明いただきたい。</p>
<p>事務局</p>	<p>資料 1「本日の検討内容」について説明する。 本日は「文化・芸術」「産業」「地域のにぎわい」「区民参画・協働・シティプロモーション」の政策分野について、2040 年の望ましい姿と方向性、基本目標に盛り込むべきキーワードについて、検討いただく。 小委員会の検討事項について、第 1 回の小委員会と同様、区民参画結果や基本構想策定支援シートを参考に、各政策における「2040 年の望ましい姿」「望ましい姿を達成するための方向性」について検討いただく。 小委員会から第 3 回審議会にかけての流れについて、先日の第 1 回小委員会と本日の第 2 回小委員会でいただいたご意見の取りまとめを行い、委員長と内容を調整する。その後 5 月 25 日の第 3 回審議会において、小委員会での議論の結果を報告いただく。 本日の会議の流れとワークシートについて説明する。前回からワークシートの様式を変更している。各政策分野における「2040 年の望ましい姿」「望ましい姿を達成するための取組」「基本目標に盛り込むべきキーワード」について意見をいただく。皆さまのご発言の内容を「2040 年の望ましい姿」や「基本目標に盛り込むべきキーワード」等の欄に事務局がリアルタイムで記入する。検討の流れについては、まず、基本構想策定支援シートの概略を事務局から説明する。その後、政策ごとの 2040 年の望ましい姿、望ましい姿を達成するための取組、基本目標に盛り込むべきキーワードについて、意見をいただきたい。なお、本日の小委員会終了後、追加で意見がある場合は、資料 3「追加意見シート」を 4 月 27 日(月)までに事務局へ提出いただきたい。 資料 1「本日の検討内容」についてのご説明は以上である。</p>
<p>委員長</p>	<p>第 1 回小委員会の経験を踏まえ、ワークシート様式を一部変更している点、また進め方として、まず区から説明の後、委員のバックグラウンドを考慮し、冒頭に 2 名を指名して意見をいただき、その後残りの時間で他の委員からご意見をいただく流れとする点をご留意いただきたい。2 時間で 4 つの政策分野を扱うため、1 政策 20～25 分程度でバランスよく議論を行いたい。委員の発言時間を確保するため、事</p>

	<p>事務局は端的に説明いただきたい。</p> <p>次第3「政策分野別の基本構想策定支援シート」のうち(1)「文化・芸術」について、事務局から説明いただきたい。</p>
事務局	<p>資料2「基本構想策定支援シートの『文化・芸術』」について説明する。</p> <p>1の文化・芸術分野における主な成果と実績では、平成29年度から令和6年度時点の成果と実績を整理している。詳細は割愛するが、平成27年3月の「荒川区俳句のまち」を契機とした俳句文化振興、交流事業実施都市数や国内交流都市との連携事業数の増、荒川区伝統工芸技術保存会との共催による伝統工芸ギャラリー開設等の実績や成果を整理している。</p> <p>2の区を取り巻く社会動向について、新型コロナウイルス感染症の拡大を契機にデジタル化の進行とオンライン需要が拡大し、オンライン展示・デジタルアーカイブの整備・遠隔ワークショップの普及が進んだ。またこの間芸術文化が地域振興の核として位置づけられる動きが強まっており、公共空間でのパブリックアート、住民参加型の制作・対話型イベントの促進、地域文化財の保存・活用等が進んだほか、文化の振興・保全・活用の資源を確保する手段として、文化観光への注目が集まっており、博物館など地域の文化拠点等と連携した地域の文化観光の振興を総合的かつ一体的に推進することが重要となっている。国及び東京都の政策動向は記載のとおり。</p> <p>「3区の現状」について、荒川区では平成27年3月に「俳句のまちあらかわ」を宣言し、以降10年間にわたって、俳句文化振興を推進してきた。区政世論調査の「芸術文化を進行するために区が充実させていくべき取組」の設問では、「子どもが芸術文化に親しむ機会の充実」と回答した人が26.9%となっており、全体で2番目に高い結果となっている。「区の芸術文化で特色のある分野」では、「伝統工芸」が25.5%、「服飾(ファッション)」が12.9%、「俳句」が12.8%であった一方で「わからない」が37.1%、「特になし」が16.9%となっている。</p> <p>これらを踏まえた4の課題は、子どもから大人まで、芸術文化を知り、気軽に触れることのできる機会の創出が重要であると考えている。また、伝統文化の保存・継承に向けて、活用方法の検討や区内外への魅力発信、継承者職人の高齢化、継承者不足への対応が課題であると認識している。</p> <p>基本構想策定支援シート【文化・芸術】の説明は以上である。</p>

<p>委員長 委員</p>	<p>あらかじめ指定した委員から発言いただきたい。</p> <p>2040年の望ましい姿を考える前提として、文化芸術の存在意義を整理したい。1つは、街の価値を底上げし「選ばれるまち」にする力があることだと考える。他自治体との差別化の上でも重要な政策分野である。2つ目に、高齢者の孤立防止や子どもの自己肯定感向上など、福祉や教育だけでは解決しにくい社会課題に横断的な効果を持つ。3つ目に、地域のアイデンティティ形成への寄与がある。</p> <p>その上で2040年の望ましい姿として、対象と手段の2つの観点から考えた。対象の観点からは「誰もが文化芸術に触れ、関わるができるまち」を挙げたい。一部の担い手や愛好者だけでなく、無関心層も含めて裾野を広げていく視点が重要と考える。障害の有無や年齢、経済状況にかかわらず、文化芸術を享受し創造する権利が区民一人ひとりにあるという前提に立ちたい。</p> <p>手段の観点からは「日常の中で文化芸術に触れ、関わるができるまち」を挙げたい。支援シートを拝見すると、イベントや継続的な活動など一定の取り組みは行われているが、特別な機会にとどめず、身近な場所で日常生活の中で自然に触れられる環境が必要と考える。具体的には、駅前、公園、商店街など区民の生活動線に文化芸術を組み込んでいくことが重要である。このような考えで望ましい姿を整理した。</p>
<p>委員</p>	<p>荒川区の文化団体として約20の団体があり、年間30件余りの事業を行っている。内容としては、日本舞踊、茶道、俳句、書道、囲碁・将棋、生け花など、日本の伝統文化・芸術が中心である。これらを文化として将来に残していくことは大変な労力を要する。</p> <p>子どもたちに伝えようとしても、昼間は学校で来られず、夕方以降は保護者が塾に通わせているため参加できないという状況がある。その結果、ご年配の方しか集まらない。日本舞踊や茶道の先生方は皆プロで、熱心に教えているが、子どもが参加できない。関心はあっても、費用面から保護者が負担をためらい参加が進まない場合もある。</p> <p>教育委員会は、俳句のまちと銘打って、学校教育の中に俳句を取り入れるなど力を入れている。そのように学校教育と結びつくとスムーズに広がる。ほかの伝統文化についても、本来は学校教育の中で読み書きそろばん以外の社会に出て役に立つ要素として位置付けていく必要があるが、社会教育課などの機能が弱くなり、子ども会活動や青年会活動も廃れてきている。そこにどう力を注ぐかが課題である。</p> <p>以前、年に1回サンパール荒川を借り切り、子どもフェアとして三</p>

	<p>味線などを体験できる場を設けた際には1,000名程度の参加があったが、最近では300名程度に減っている。学校でのチラシの配布も難しくなり、子どもに情報を届けることが難しくなっている。将棋大会や書道大会も参加者が減少している。</p> <p>私は将棋会の会長として、年1、2回でもよいので、学校教育の授業時間を1時間ほどいただき、駒の動かし方だけでも教えてほしいと相談しているが、学習指導要領に基づく教科をこなすので精いっぱい、それ以外は取り入れられないと言われている。このままでは、伝統文化を子どもたちに継承していくことは夢物語になりかねないと危惧している。</p> <p>また、日本の伝統という観点から、外国人が日本を評価する点としてマナーの良さ、礼儀正しさがある。人の前を割って通らない、訪問先ではきちんと靴をそろえるなどである。一方、浅草や上野、新宿を歩くと、歩きながら食べる行為が当たり前になっている。私たちが子どもの頃は親に厳しく叱られたものであり、日本の文化ではない。今や歩き食べが文化のようになり、手が汚れたからと商品を戻すなど、商売にも支障が出ている。日本の文化とは何か、原点から考える必要があると考える。</p> <p>区の伝統文化として、二天棒という担ぎ棒二本のみで支える神輿の担ぎ方がある。町ができた頃、五穀豊穡を祈るために始めた際に、畦道で狭いところを通ったためにこのような担ぎ方となった。各地区にこうした伝統的な祭りやそれを支える神社があるので、子どもたちを巻き込み、10年先も続くよう奨励していくべきである。盆踊りについても、地域文化として続けていく必要がある。その際には、区が一方的に実施するのではなく、地域の皆さんと共同で行うことが重要である。「愛する荒川のためにみんなでやろう」ということで、祭りや盆踊りを支え続けるようなまちを20年先も目指してほしい。</p> <p>荒川区文化祭の参加者数が、平成29年は2,816人、令和6年は6,230人と記載されており、コロナ禍を挟んでいるにもかかわらず大きく増加しているように見えるため、確認したところ、出展者数のカウント方法を変更した結果であり、実際に従前と同じ基準で見ると微減していると聞いている。文化祭参加者数全体も、実際にはやや減少しているとのことだった。こうした経緯があるにもかかわらず、この数字だけが資料として出されると実態が分かりにくいと感じる。</p> <p>また、荒川区内では様々な団体が組織され、その発表の場として文化祭が育ってきたと聞いており、参加者数や参加部門も増えてきたと</p>
委員	
委員	

<p>区</p> <p>委員長</p>	<p>承知しているが、現状を見ると若者のポップカルチャーや外国人住民の文化などについては、区内に多数存在するにもかかわらず、発表の機会が十分ではなく、組織化されていない文化活動をどのように取り込んでいくのが今後の課題であると考え。多文化共生が 20 年後に地に足のついたものになっている必要があると考え、区が新たに組織化するというよりも、参加しやすい仕組みや場のつくり方を工夫する必要がある。文化祭に限らず、文化政策全体で参加しやすい仕組みづくりを考えていただきたい。</p> <p>化祭参加者数については、実際に会場に来場した方の数は、平成 29 年と比較して約 500 人程度減少している。一方で、参加という意味での作品出展数については、従前は入選作品のみをカウントしていたが、コロナ後を契機に子どもを含めすべての出展作品をカウントするように変更したため、数値上大きく増えている。こうした経緯から平成 29 年との単純比較は適切でなくなっているが、直近数年で見ると参加者数はおおむね横ばいで推移している。</p> <p>取りまとめの際には、文化・芸術分野に限られない意見もあった点に留意いただきたい。</p> <p>次第 3 「政策分野別の基本構想策定支援シート」のうち(2)「産業」について、事務局から説明いただきたい。</p>
<p>事務局</p>	<p>資料 2 「基本構想策定支援シートの『産業』」について説明する。</p> <p>1 の産業分野における主な成果と実績についても詳細は割愛するが、ファッション関連に特化した総合支援施設である「イデタチ東京」の開設や創業支援セミナーの受講者数の増、融資実行件数の増、魅力あふれる個店づくり事業における参加店に向けたコーディネーターによる定期的な診断助言の実施等の実績や成果を整理している。</p> <p>2 の区を取り巻く社会動向について、円安等による原材料費やエネルギー価格の高騰の長期化により、特に中小企業や・小規模事業者の経営に大きな影響を及ぼしている状況である。またデジタル基盤の高度化に伴い、クラウド、ビッグデータ、AI、IoT、ブロックチェーンなどの新たな技術が急速に発展・普及し、新しいビジネスモデルの創出が容易になった。このほか、全国的に大型ショッピングモールやディスカウントストア、ドラッグストア等の増加により、消費者の利便性向上といった効果が見られる一方、商店街の衰退、地域コミュニティの希薄化など、地域経済やまちづくりへの影響が生じている状況である。国および東京都の政策動向は記載のとおりである。</p> <p>3 の「区の現状」について、事業所数は、2016 年の 9060 から 2021</p>

	<p>年の8,346と大きく減少しており、その要因として、円安等による原材料費やエネルギー価格等の高止まり、少子高齢化の進展による人手不足、経営者の高齢化による後継者不足等の影響があると考えられる。製造業者の約4割が人手不足の状況であるほか、大型スーパー等の増加やネット通販の広がり等により消費者の購買行動の変化等の影響で大きく減少してきていることに加え、商店街運営においても、役員の高齢化が進行し、深刻な後継者不足により商店街の組織力が低下してきている状況である。</p> <p>4の以上を踏まえた課題は、区内企業の生産性向上等による高付加価値を創出し、区内での雇用の確保と拡大を図り、地域内消費を促進することにより地域経済の好循環を生み出していく施策展開を図っていく必要がある。小規模なモノづくり企業のネットワーク形成や経営課題の解決、生活のインフラとしての機能や地域コミュニティの拠点としての機能をもつ商店街の支援と振興を一層進めていくことが課題であると認識している。</p> <p>基本構想策定支援シート【産業】に関する説明は以上である。</p>
<p>委員長 委員</p>	<p>あらかじめ指定した委員から発言いただきたい。</p> <p>2040年の産業分野の望ましい姿として、社会の変化に応じて新たな産業が生まれ、それが従来から地域を支えてきた産業と融合し、魅力ある地域経済が生まれ、活力あるまちになっている状態をイメージしている。もっとも、理想と現実のギャップは非常に大きいですが、2040年の荒川区は活気があり、産業も元気であってほしいと考える。</p> <p>日本全体で見ると、2040年には人口が現在から約1,500万人減少し、生産年齢人口も約1,400万人減少すると見込まれている。生産年齢人口比率も現在の約58.7%から2040年には53%台まで低下するとされており、エッセンシャルワーカーを含め労働集約型産業が人手不足で成り立たなくなる懸念がある。運送業、機械製造、建設業、物販、介護・医療、飲食等、生活を支える分野で人材不足が深刻化し、何もしなければ日常生活に支障を来す局面も自然発生的に生じると想定される。</p> <p>対策としてこれまでシニア・女性・外国人の活用が謳われ、一定の取り組みも行われてきたが、ここからさらに労働者数を増やすのは容易ではない。一方、基本構想審議会で示された荒川区の将来人口推計を見ると、荒川区は例外的に人口が約1万人、16～64歳人口も約1万2,000人増加する見込みとなっている。全国的に見ると、生産年齢人口の需要に対し供給が満たされるのは東京圏のみで、他地域は7、8</p>

委員	<p>割程度しか満たせないような試算もあり、都市部への人口流入が続く構図がある。</p> <p>ただし、荒川区における直近の人口増加は外国人住民の増加の寄与が大きく、単純に人口増がそのまま労働力の増加に結びつくかについては慎重な検証が必要と考える。就労資格の制約などもあり、外国人が増えたからといって減少する生産年齢人口をすべて補えるわけではない。</p> <p>産業構造を見ると、従来から荒川区の主力は製造業、小売業、建設業であり、他区に比べても製造業と建設業の構成比が高い。一方で、事業所数はこの10年で大きく減少しており、経済センサスの比較では、全事業所が1万弱から8,300余りへ、製造業は2,400から1,300程度へと減っている。他地域と比べればなお割合は高いものの、構造的な縮小傾向にあることは否めない。</p> <p>このような状況の下では、既存の産業の延長線上では限界があり、新たな産業を生み出し、それと既存産業を融合させることで地域経済を維持・発展させていく必要があると考える。そのためには、区内企業の付加価値向上、製品・サービスの魅力の見える化、ブランドの確立や認知度の向上が不可欠であり、これができなければ後継者不足の解消も進まない。</p> <p>人手が減る中で、機械化・デジタル化・DXの導入が可能な分野では積極的に推進する必要があるが、一部には機械で置き換えることが難しい産業も存在している。そのため、導入可能な分野から段階的にDXを進めるとともに、区内に立地する企業であっても販路は全国・海外に開かれていることを前提に、海外や他地域へ販路を拡大するための支援も重要である。</p> <p>さらに、産官学連携を含め、新規事業創出の取り組みを強化していくことが必要である。子どもの頃と比べた体感として、製造業の大規模工場は海外や地方に移転し、昼間人口も減少したように感じる。従来の区内で働くモデルから、働き方や働く人の多様性を前提にした新たな産業構造に移行しない限り、2040年の荒川区の産業は衰退してしまう懸念がある。こうした問題意識から、先ほど述べたような望ましい姿と方向性を考えた。</p> <p>荒川区には制度融資や各種補助金をはじめ、手厚い産業支援を行っていただいております。産業界を代表して感謝する。地元の経営者は、組合活動だけでなく、PTA、学校関係、自治会、警察、消防、各種団体等の役員としても重要な役割を担っている。こうした経営者の存在が地</p>
----	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

委員	<p>域を支えているが、区の現状にもあるように、事業者数は年々減少している。今後も活力ある荒川区を目指すためには、区内需要と事業者数の維持・増加が必要である。</p> <p>そのために、業種を問わない創業支援施設の開設、事業者に対する各種支援策や補助金の充実、経営者交流促進への支援などに力を入れていただきたい。こうした取り組みにより、荒川区への思い入れや愛着を強めることが重要である。</p> <p>「60歳以上の経営者が6割」という実態が非常に重く響いた。東京全体では開業件数が増えているというデータもあるが、荒川区ではこのままでは産業が静かに衰退していく姿が見えてしまう。</p> <p>今のままでは「崖に手すりをつける」程度の対症療法に終始し、15年間対症療法を続けて終わってしまう懸念がある。必要なのは、次の世代が楽しみながら産業を引き継いでいける環境づくりであると考え。具体的には、高い生産能力と技術を持つ既存の事業者と、新しいアイデアを持ちながらも力の不足している次世代の担い手をどう結び付けていくかが鍵になる。具体的施策まではまだ考え切れていないが、そうした視点を重視すべきと考える。</p>
委員	<p>既存産業として、製造業、商業、ものづくり、繊維等は荒川区のアイデンティティであり、しっかり守っていく必要があると考える。その上で、新規創業について申し上げたい。自分自身、区外で2社を経営しているが、正直なところ荒川区で創業するメリットや魅力を感じにくく、区外に本社を置いている。</p> <p>創業時の課題として、第一に資金調達がある。借入れが難しい、あるいは借入れに抵抗がある人はエクイティに頼ることになるが、荒川区にはエクイティファイナンスの土壌が乏しく、都心・副都心に流れてしまう。第二に採用面でのイメージである。所在地が荒川区の企業に人材が応募してくれるのかという懸念があるため、「住む場所と働く場所が近い」という地の利を活かした職住近接のメリットをもっと打ち出すべきと考える。第三に取引先・顧客からの評価である。港区や渋谷区、千代田区といった所在地の方が、与信判断上有利に働くケースが多いのが現実である。この事業・サービスだから荒川区なのだとなってもらえるような創業地としてのブランド戦略が必要であると考え。荒川区の立地特性や強みと結び付いたイメージを確立することが重要である。</p>
委員	<p>10年先を見据えたとき、世界と繋がる企業を荒川区に誘致することを考えるべきであると考え。筑波研究学園都市、羽田空港、霞が関</p>

委員	<p>など、主要拠点への距離は非常に近いという地の利を活かすべきである。</p> <p>世界市場を相手にする企業が来れば、それに付随する多様な産業も生まれる。細かな対症療法的な議論だけでなく、「荒川区が中心になる」というスケールの大きな発想を持つ必要がある。羽田空港や成田空港まで 30 分圏内であり、本社機能を置くには非常に良い立地である。土地がないなどと制約だけで考えず、荒川区として企業誘致に本気で取り組みれば、自ずと人も産業も集まってくると考える。</p> <p>事業承継については、金融機関との意見交換でも M&A の話が中心になることが多いが、スタートアップ企業が荒川区で創業する際、事業承継に困っている既存事業者とのマッチングを区が主体的に行う仕組みがあれば、新旧の事業を組み合わせることで経営基盤を強化できる可能性がある。</p> <p>創業支援施設については既に一定の取り組みがあるものの、より充実させることで、新たな創業の起点とし、そこから区内で事業を広げていく場の確保に繋げることができる。生産設備を承継して活用することも可能となり、新規事業と承継事業をミックスしながら、安定した経営を組み立てることができると思う。</p> <p>また、ブランディング戦略については、荒川区という地域の魅力だけでなく、個々の企業の付加価値や、「なぜ荒川区にあるのか」という意味付けを明確にすることが重要である。成田空港との近接性など、地の利も含めて区として積極的に PR していくべきである。これまでは観光面での PR が中心であったが、世界から企業を呼び込む視点での PR に活かす必要がある。</p> <p>企業誘致というと、荒川区には土地がなく難しいという発想になりがちだが、必ずしも大規模工場を誘致するだけが誘致ではない。新たな産業を生み出す上で、委員から出された様々なアイデアは有効であると思うので、これらを踏まえた施策展開を期待する。</p>
委員	<p>昭和の時代、荒川区は典型的な職人の町であった。自転車関連工場、大量の木工・家具業、ラジオやテープレコーダー、傘の柄、鉛筆、プレス加工など、あらゆる分野の下請け工場が集積し、大企業を支える重要な歯車として日本中・世界中を支えていた。しかし現在、そうした工場はほとんど無くなってしまった。</p> <p>台東区は大通りがなくとも浅草や上野など観光資源で人を集め、足立区は広大な土地を活かして大学や病院を多数誘致している。一方、荒川区は土地が狭く、これまでのような工場集積は難しい状況にあ</p>

<p>委員長</p>	<p>る。町屋駅前の大規模用地も民間開発となり、公共性の高い活用は難しくなっている。</p> <p>しかしながら、南千住の JR 貨物の土地など、まだポテンシャルのある土地も残っている。例えば JR と連携して大規模なホテル等を誘致し、外国人を含む多くの人滞るような拠点づくりを検討すべきではないかと考える。何もしなければ今後の発展は望めず、荒川区は魅力の乏しい町になりかねない。土地の制約はあるものの、残された可能性を最大限生かす戦略的な土地利用と産業振興の検討が必要である。</p> <p>国の資料などを見ていると、フィジカル AI など、現実世界と情報世界をどのようにつなげるかに注目が集まっており、ものづくりや現物を扱うことの価値を一番上に位置付けていただくのが良いと考える。</p> <p>企業誘致については、立地特性のポテンシャルを最大限生かしたまちづくりにより産業振興を進める方向性が良いと考える。</p> <p>スタートアップ振興には、大学も力を入れているので、ぜひ連携して取り組んでいただきたい。また、これから起業のあり方も大きく変わってくると考えられるので、その変化をうまく取り込むことが重要である。そのときに、どこをモチベーションにするのかという点が、課題の一つであり、将来像を描く上でのポイントになると考える。</p>
<p>委員長</p>	<p>次第3「政策分野別の基本構想策定支援シート」のうち(3)「地域のにぎわい」について、事務局から説明いただきたい。</p>
<p>事務局</p>	<p>資料2「基本構想策定支援シートの『地域のにぎわい』」について説明する。</p> <p>1の地域のにぎわい分野における主な成果と実績についても詳細は割愛するが、ふらっとにっぽりでの繊維街と連携したイベントやインバウンドイベントの実施、地球の歩き方やことりっぴ日暮里等の観光パンフレットを活用した区の魅力発信等の実績や成果について整理している。</p> <p>2の区を取り巻く社会動向について、コロナ禍では、国内外移動制限により観光客数は大幅に減少したものの、終息に伴って観光客数は回復・増加している。特にインバウンドが大幅に増加しており、令和7年の年間訪日外国人旅行者数は42,683,600人で、前年比で15.8%増と過去最高を更新した。デジタル機器を活用した翻訳サービスやキャッシュレス化が進むとともに、インバウンドの増加に伴う地域住民の生活環境への影響(オーバーツーリズム)が課題となっている。国</p>

	<p>及び東京都の政策動向は記載のとおり。</p> <p>3の「区の現状」について、観光的な評価を受けている事例についても、売り上げや新規顧客の獲得には十分に活かされておらず、個店の魅力が効果的にPRできていない状況である。一方で、世界的な宿泊施設紹介サイトで、荒川区が「味覚の穴場」の世界10都市の一つとして掲載されたことで、国内外からの注目度が増している。</p> <p>4の以上を踏まえた課題は、荒川区の魅力を区内外の人々に発信し、新たな来訪者やリピーターを増やしていくことが重要であると認識している。また、交通の利便性を活かし、荒川区を通過するのではなく区内の滞在時間を上昇させることが課題であると認識している。そして、インバウンドの更なる増加を見据えて、受け入れ態勢を強化していくことが重要であると認識している。</p> <p>基本構想策定支援シート【地域のにぎわい】に関する説明は以上である。</p>
<p>委員長 委員</p>	<p>あらかじめ指定した委員から発言いただきたい。</p> <p>荒川区は観光資源、特に自然資源は豊かとは言えない状況にあるが、都心部なのでこの点は致し方ないと思う。一方で、史跡や公園などの人文資源は一定程度存在する。大田道灌や松尾芭蕉にゆかりのある場所があり、日常生活の中にも魅力がある。世論調査では、商店街や銭湯、緑が豊かであること、都電の存在などを荒川区の魅力として挙げる方が多い。</p> <p>一方で、商店街や銭湯はどんどん減り続けており、非常に厳しい状況にある。先ほどの産業の話にもあったが、産業全体が厳しい状況にある。緑被率も、23区内では下から数えたほうが早い状況であるにもかかわらず、区民意識調査では荒川区の魅力として上位に挙がっている。この点を、魅力をつくるためにも、もっと大切にしていける必要があると考える。</p> <p>区民参加で緑を増やしていくこと、商店街など個店の魅力づくりを応援していくこと、中小企業の支援を充実させていくことは、先ほどの産業振興の議論とも深く関わるが、非常に重要であると考えている。自治体としての地道な仕事を続けていくことが、荒川区の魅力の維持・向上に繋がるのではないかと、先ほどの議論を聞きながら考えていた。</p> <p>また、一般的な商店街とはやや性格が異なるが、日暮里繊維街について触れたい。日暮里ではファッションデザインコンテストが行われており、コロナ前は受賞作品を上海のプロモデルに着用してもらって</p>

ファッションショーを日暮里のラングウッドホテルで開催していた。受賞デザイナーにとって、自分の作品がスポットライトを浴びて華やかに披露されることは、非常に大きなモチベーションアップに繋がっていたと思うし、観客としても十分楽しめる内容であったため、コロナ禍でファッションショーが途絶えてしまったのは非常に残念である。昨年は20周年ということで、ふらっとにっぽりで関係者のみのショーが行われ、受賞作品もふらっとにっぽりの入口階段に6日間展示されていたが、そこを訪れた方は延べ1,600人だったと所管から聞いている。作品を間近で鑑賞できることも非常によい取り組みであり、それ自体は評価できるが、それでもファッションショーの規模が以前と比べ大きく縮小していて残念に感じている。また、今年度は展示のみでショーは実施しない予定と聞いている。にぎわいには一定の華やかさも必要であり、環境整備をした上でイベントを実施していくことが、今後も重要であると考えます。

また、様々な手法を駆使しながら旅行者に魅力を発信していくことが重要である。現在も「ArakawaAmazing!」という訪問者向けウェブサイトや、回遊性向上のためのスタンプラリー等にチャレンジしているが、こうした取り組みを引き続き実施していくべきと考えます。

また、政策課題として、「インバウンドのさらなる増加を見据え、受け入れ体制を強化していく必要がある」と資料に記載されているが、日本の多くの観光地ではオーバーツーリズムが大きな問題になっている。荒川区が20年後にそのような状況に陥るかどうかは分からないが、オーバーツーリズムは、訪れる人にとっても住んでいる人にとっても望ましい状況ではない。状況を的確に捉えつつ、居住環境の保持とインバウンド受け入れとのバランスをどう保っていくかという問題意識を持ち続けることが必要であると考えます。

体制強化という点では、荒川区は西日暮里駅構内に観光案内所を設置しており、インバウンド観光客の増加に比例して利用数も増えているようである。インターネットやアプリで事前に調べる人も多いが、現地で資料を手にとって見ながら訪れるというスタイルの方もいる。紙媒体の方がネットより情報量が多い面もある。駅構内にあるため、そこを訪れた方が実際に荒川区内に降り立ったかどうかを数字で把握するのは難しいが、こうしたリアルな拠点は今後も大切にしていきたい。

また、日本を訪れた方に荒川区の魅力を発信しながら快適に旅してもらえよう、観光案内所などでの丁寧な案内も必要である。多言語

委員	<p>で対応していると聞いており良い取り組みだと考えるが、その場で親切かつ丁寧に対応してほしい。ややお節介に感じられるかもしれないが、それも下町・荒川区の魅力の一つであると思うので、そうした丁寧さを大事にしていきたい。最近は排他的な動きが目立ってきているが、荒川区を訪れた方には心地よく過ごしてもらい、良い思い出を残して帰っていただきたいと考える。</p> <p>20年後の荒川区観光、にぎわいがあるべきかという望ましい姿を検討している中で、先ほどまで議論してきた文化・芸術を大切にしていこうと、荒川区に根付く産業と新たな産業、そして区民の実生活を大切にすることが重要であると考えている。区民の暮らしを中心に据えることが、荒川区の魅力を増やし、強くしていくことに繋がるのではないかと感じる。20年後には上辺だけではなく「本物の魅力」が求められると感じている。自治体としては地道で基本的な活動が求められるが、人を真ん中に据えることが、遠回りのようであるが地域のにぎわいをつくる上で最も必要なことだと考える。20年後の観光の姿を考えるのは難しいが、地元の魅力をしっかり保ち、発展させていくことが必要であると考えている。</p> <p>委員の「地域の住民を真ん中に据えるべき」という意見に同意する。</p> <p>日暮里を経由する観光客は多いものの、そこから荒川区内に回遊せず、谷中の方に向かう人が多いのが現状ではないか。現状、荒川区は通過点、廊下のような存在になりがちで、どこかへ向かう途中に通り過ぎてしまっているのは非常にもったいない。回遊性を高めるための仕掛けが極めて重要だと感じる。一方で、日暮里繊維街は非常に魅力的なツールになっており、最近では海外のガイドブックでも「東京の穴場」として渋谷でも京都でもなく荒川区が紹介されるようになっている。これは大きな財産であり、今後さらに伸ばしていかなければならないと考える。</p> <p>2040年に自分が見たい荒川区のにぎわいの姿には、老若男女の区民が、半分趣味、半分仕事のような感覚で楽しみながら地域に関わっている姿を中心に据える必要があると考える。</p> <p>一方で、行政のみでは限界がある。観光プロモーションに関わる中でも、行政で「横串」と呼ばれるような課題を突破しなければ、大きな絵が描けないと感じる。予算も人も減る中で、「人が足りない」ことを理由に個別対応をしていると、職員に過度な負担がかかる。1本の施策で3、4本分の効果を生むような取り組みを設計していく必要があり、これはにぎわいづくりにおいても同様の課題だと感じる。</p>
----	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>委員</p>	<p>にぎわいをつくるということは、人に来てもらい、お金を使ってもらい、さらに「もう一度来たい」と思ってもらうところまでセットで考えないといけない。そうでなければ住民の満足は得られず、オーバーツーリズムの問題も出てくる。その点を行政と民間がどう一緒に取り組んでいけるかが課題だと感じる。</p> <p>宣伝力が重要であるが、民間による宣伝だけでは限界があり、行政も力を入れて取り組むことが重要である。</p> <p>多くの人が集まる著名な観光地を訪れた際にも、実物の魅力以上に宣伝の効果によって多くの人が集まっていると感じた。どんなに良いものでも、宣伝しなければ人には伝わらない。テレビも半分以上が広告であり、スポーツ選手のユニフォームにも企業名が大きく表示されているなど、あらゆるところに宣伝が組み込まれている。</p> <p>荒川区としても、今後いかに宣伝に力を入れるかが重要である。日暮里繊維街についても、今以上に力を入れていくには、バス通りを交通規制して道路を 300～500 メートルほど歩行者天国のようにし、その区間で露店を出したり盆踊り大会を開催したり二天棒の神輿通すなど大規模なイベントをすることが強力な宣伝になると考える。</p> <p>宣伝をしなければ、どんなに良い商品や資源があっても埋もれてしまう。日暮里繊維街を「繊維街で売り出す」というような区としての明確な方針を持ち、さらに面白い仕掛けをいくつか加えることで、外国人観光客も「日暮里で降りて、日暮里繊維街の祭りを見よう」となり、町の活性化にも繋がると考える。</p>
<p>委員長</p>	<p>頂いたご意見については、取りまとめの際には、シティプロモーションに関する政策の中で整理頂いた方が分かりやすいかもしれない。</p>
<p>委員</p>	<p>区議会の観光文化の特別委員会に所属しており、宮崎市に視察に行ったが、宮崎市では CRM（カスタマー・リレーションシップ・マネジメント）を実施している。CRM とは、直訳すると顧客関係管理であり、一度来てくれたお客さんがどういう属性で、何を求めているのかを分析した上で、単に PR するのではなく、属性ごとに応じて効果的なアプローチを行う民間のマーケティング手法である。</p> <p>具体的には、観光サイトや鉄道会社との連携により、どのような方々が荒川区を訪れているのかを調査し、何を求めているのかを分析する。その上で、資料に記載のあるさまざまな拠点や商店など、潜在的な観光資源が数多くあるにもかかわらず認知されていない現状を踏まえ、荒川区から直接、ターゲットに情報を届けに行くことが必要と考える。</p>

委員	<p>観光で訪れる人の拠点になる施設が少ないと感じている。例えばホテルのような宿泊施設を日暮里周辺にもう少し整備できれば、成田空港からのアクセスの良さも活かして、日暮里を拠点に日本国内を周遊するような形がつかれるのではないかと考える。物流というハブ・アンド・スポークの「ハブ」を日暮里に位置付けるイメージである。成田空港から日暮里に到着し、日暮里に滞在しながら地方にも足を伸ばし、また日暮里に戻ってきて区内を散策し、コト消費・モノ消費を行い、最後に日暮里から成田へ戻る、という流れができれば、荒川区に滞在する時間が長くなり、その分、区内での消費やにぎわいづくりに繋がる。</p> <p>大きなホテルを整備しようとする、用地の確保などの課題があり難しい。また、観光需要を民泊に求めようとする、既に民泊を巡ってさまざまな問題があり、規制を強化している自治体も多い。そうした状況の中で、どういった表現や方向性で「観光拠点施設」の整備を位置付けるかは悩ましいところである。それでも、何らかの形で観光の拠点となる施設を整備できれば、荒川区に滞在する時間が長くなり、区内でのにぎわい創出に繋がるのではないかと考える。</p>
委員長	<p>先ほど産業の議論の最後の方で出てきた「立地特性」や「ポテンシャル」という観点が、観光分野でも共通のテーマとして出てきているという印象を持っている。そこをうまくつなげて整理していただくとよいと考える。</p> <p>区の政策課題のうち、回遊性・周遊性の向上については、具体的にどのように実施するのが重要である。海外の事例を調べると、うまくいっているところは、一つの場所に行くだけで満足してしまうのではなく、少しずついろいろな回ることによって全体として満足度が高まるような仕組みを作っている。また、各所に拠点となる施設を設け、拠点のネットワークをつくることで、滞在時間の延長に繋がっている事例が多い。荒川区としても、こうした方向性を踏まえつつ、どのように回遊性を高めていくのか、書ける範囲で将来像や方針を示していただきたい。</p>
委員長	<p>次第3「政策分野別の基本構想策定支援シート」のうち(4)「区民参画・協働・シティプロモーション」について、事務局から説明いただきたい。</p>
事務局	<p>資料2「基本構想策定支援シートの『区民参画・協働・シティプロモーション』」について説明する。</p> <p>1の区民参画・協働・シティプロモーション分野における主な成果と実績についても詳細は割愛するが、区政に関心がある区民の割合の</p>

	<p>増加や荒川コミュニティカレッジ修了生等が立ち上げた地域活動団体数の増、荒川区公式ホームページの機能の充実や YouTube における登録者数の等について整理している。</p> <p>2の区を取り巻く社会動向について、外国人住民の増加に伴い地域活動の協働のほか多言語対応等、公聴機能の充実が求められています。また地域福祉や防災など、複雑化する課題への対応の必要性が高まる一方で、自治会や町内会への加入率低下など、地域のつながりの希薄化が懸念されている。さらに、新型コロナウイルス感染症の流行によって、地域活動に制約が生じた一方で、デジタル技術の活用によって地域内の連絡を効率化し、新たなサービス提供を可能とすることへの期待も高まっている。国及び東京都の政策動向は記載のとおり。</p> <p>3の「区の現状」について、「区政情報の入手方法」について「あらかわ区報」からの情報入手が約50%、次いで「荒川区ホームページ」が約20%程度の結果となっている。近年では「LINE」や「X」などのSNSの割合は増加傾向にある。また「区の魅力を人に勧めたいと思う割合」は67.1%となっており、「区に愛着を感じている人」の割合は79.3%と高い結果となった。基本構想等策定に向けたワークショップにおいて、区政に関する意見交換の場が少ないという意見が多くあったほか、区の弱みや課題として「区としての知名度が十分でない」「発信力が弱い」という意見が多く寄せられた。令和7年度より、区の多様な魅力を区内外に広く発信するため、シティプロモーションへの取組を強化した。</p> <p>4の以上を踏まえた課題は、現状、区に対する意見効果の場や機会が少なく、特に現役世代の参加を可能とする仕組みづくりが重要であると認識している。また少子高齢化やライフスタイルの変化により地域コミュニティの希薄化が進むことが懸念され、地域行事・地域活動の減少が進むことが見込まれることから、コミュニティ活動への参加ハードルの低減が課題であると認識している。地域が活性化し発展していくために、区の魅力を広く発信するシティプロモーション活動が課題であると認識している。</p>
<p>委員長 委員</p>	<p>あらかじめ指定した委員から発言いただきたい。</p> <p>スマホが90%以上普及しているにもかかわらず、区政情報の入手方法は全体の約50%が区報から、高齢者に限っては約70%が区報からであり、いまだに紙というものを大切にしている現実がある。これは15年後も大きくは変わらないのではないか。情報が増えればみんなが豊かになるのかということ必ずしもそうではないということ強く感</p>

委員	<p>じる。</p> <p>2040年という大きな視点で見ると、行政だけでできることには限界があると感じる。DXなど新しいことを取り入れていかなければならない。区と民間とNPOが協力してプロジェクトをやっていくようなクロスセクターでの取組を当たり前にしていく仕組みを早急に考える必要がある。</p> <p>シティプロモーションについては、外に発信するのは結局内側の人である。そのため、区民が楽しみながら地域に関わり、誇りを持って暮らしている状況をアピールしていくことが重要である。</p> <p>現状では、行政が提供者で区民が受益者という構図が前提とされているように感じるが、この形のままでは乗り切れない課題が、すべてのテーマに存在している。行政は事業の実施ではなくプラットフォームの構築に取り組み、そこに区民が参加していく仕組みを作る必要がある。SNSのフォロワーを増やすだけでは問題の解決にはならない。</p> <p>会長を務めるリバーパーク汐入町会は50haの地域に4,500世帯、1万2千人が居住している。自治会費が1カ月1世帯150円で、年間計約800万円。加えて区の助成金が約300万円あり、合計約1,100万円が年間予算である。</p> <p>町会の加入率は区全体では約60%のところ、リバーパーク汐入町会では加入率100%であり、全ての世帯が加入している。</p> <p>なぜ加入率100%を達成し、年間予算1,100万円での活動ができるかということ、まず環境の違いがある。都立汐入公園12ヘクタールがあり、そのうち約1ヘクタールを使って、公園協会とタイアップしながら祭りなどさまざまな事業を行っている。</p> <p>うちの町の人口は1万2000人だが、年間延べ約7万人が町内活動に参加している。大きなものでは、春祭り・夏祭り・秋祭りなど、2,000~3,000人規模のイベントを年に5、6回行っている。また、防犯・防災訓練、交通安全、歳末の火の用心など、300人規模の比較的小さい行事も年6回程度行っている。</p> <p>これらの外の公園での活動以外にも、再開発によって東京都から区が引き継ぎ管理している学校の教室2つ分ほどの広さ会議室について、一部を防災備蓄倉庫としつつ、町会の人たちが日常的に利用している。</p> <p>他の町会には、300~500世帯規模のところが多く、財政的に厳しく、町会費が集まりにくい現状がある。工場跡地にマンションが建った場合にも、人は増えるが町会に加入せず、お金が集まらないという状況</p>
----	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>になる。加えて、300～500世帯規模では役員の担い手も不足しやすい。</p> <p>今後は、区が中心となって隣接する町会同士の合併を誘導し、1町会あたり3,000～5,000世帯程度、活動費として年間1,000万円規模としていく必要があると考える。他区では、町会自体が消滅してしまった事例もあると聞いている。三の輪商店街では、かつて複数の小さな町会があったが、今は盆踊りなどの際には4つほどの町会がまとまって行事を行っている。西尾久でも同様の例があると聞く。今後は、町会同士の合併を深刻な問題として捉え、規模拡大を図っていかないと、町会活動が疲弊し、消滅する恐れがあると感じる。</p> <p>リバーパーク汐入町会では、新しく「汐入クラブ」という取組を始めた。これまで、男性会社員が、退職後に地域とのつながりがなく、家に引きこもりがちになることで、認知症になる可能性が高くなるという課題があった。実際、荒川区では、女性75歳移譲の認知症有病率は23区中7位程度で比較的良好な一方、男性75歳以上の認知症有病率は23区中22位と認知症の割合が高い。そこで退職後の男性に外出を促す仕組みが必要だと考え、囲碁・将棋・麻雀などを町会で実施したところ、これまで交流がなかった高齢男性も参加するようになった。このような新しいアイデアも、一定以上の規模があるから生まれてきた。</p>
委員	<p>シティプロモーションや区民参画、協働の位置づけに違和感がある。これまで議論してきたテーマは、2040年の荒川区をつくる上での柱であったと思われるが、シティプロモーションや区民の参画、協働は、各柱をつなぐ部分になると考える。前回基本構想においても、各柱を実現するための区の実施と位置づけられていた。</p> <p>2040年の文化・芸術や産業、にぎわいを実現するためのツールを同じ位置付けで議論してよいのか。</p>
事務局	<p>現行基本構想では、情報発信や協働は横串的要素として、計画推進の手段と位置付けられている。今回の新たな政策体系の案で示している中では、区民参画や協働、シティプロモーションも政策の中に位置付けているが、あくまで議論のたたき台として示したものであり、今後の議論や整理した意見を踏まえて政策体系を整えていきたい。</p> <p>また、基本構想策定後には行政運営計画を策定する予定であり、その中でも政策・施策の体系も整理していく必要がある。いただいたご意見を踏まえて検討を進めていきたい。</p>
委員長 委員	<p>自治会の位置づけについて整理が必要という意見に同意する。</p> <p>荒川区は面積も狭く、大きな集客施設の整備を区が主導するのは現</p>

	<p>実的に難しい。一方で、花や公園などを活用して人を呼び込むことは可能である。</p> <p>最近汐入公園では、早咲きの寒桜や河津桜などが約 500 メートルにわたって咲き、外国人観光客を乗せた観光バスが連日 2、3 台来ていた。ウェディングドレスを着て写真を撮る姿も見られた。一方で、南千住のドナウ通りではツツジが一斉に咲き、JR 貨物フェスティバルでは 3 万人から 5 万人規模の集客があるなど、それぞれポテンシャルのある場所が区内各所に存在する。20 年後を見据えると、南千住 6 丁目あたりの天王公園周辺も、整備が進めばちょうどよい規模の公園になる。西尾久や日暮里南公園も、それぞれ特色を持たせていくことができると考える。</p> <p>課題は、それぞれの場所が離れていることである。そこで、バスではなくゴルフカートのような小型の自動運転車両を活用し、住民がガイドを務めるなど、区が主導し民間のコーディネーターと連携しながら、公園群を回遊する仕組みをつくることができれば、20 年後には大きな魅力になるのではないかと考える。</p> <p>特に注目しているのは、荒川区役所庁舎の建替である。建替に伴い都電通りも広がり、庁舎と花や緑をうまく組み合わせた空間づくりが可能になる。</p> <p>荒川区は大規模な建物で競争するのは難しいが、公園を軸に連携させることで、他区とは違う魅力づくりができるのではないかと考える。</p> <p>区の課題の 1 つ目と 2 つ目については、先進的な取組を行っている都市が海外に多数存在するが、隙間時間を活用するなどして、区民の気づきを行政にインプットする仕組みづくりを進めていく方向が良いと考える。15 年後には、生まれたときからデジタルツールが身近にある世代が主役となっており、デジタルを活用した参画の方向に向かうのが良い。その上で、リアルなコミュニティをどう維持・形成するかが課題となるが、この点についての基本構想での位置づけは審議会として整理が必要と考える。</p> <p>シティプロモーションで「こういうことをやった方がいい」と行政や我々が上から与える業務を作っていくのも大切だが、それだけでは、住民の「何かしたい」という欲求を満たせていないのではないかと。自分の町に貢献したいが、どう貢献してよいかわからない人は多い。その人たちと行政をちゃんとつなぐ動線が必要で、その意味でデジタルツールと紙のツールをどう連携させるかが重要になる。</p>
委員長	
委員	

<p>委員長</p>	<p>文化・芸術の分野では、意見ポストを増やして3倍に増えたという実績もある。そこで集まった紙の意見をAIでまとめて、自分たちの意見がどう反映され、荒川区の未来にどうつながっていくのかを可視化する、といったデジタルの使い方もあるのではないかと感じている。</p> <p>AIの利用を直接求めるのではなく、紙で書いたものが自動的にAIに取り込まれて分析され可視化されるようなツールであれば受け入れやすいと思うし、そういう仕組みをつくることは可能ではないかと感じている。</p> <p>1週間程度を目途に、追加意見があれば事務局に提出いただきたい。続いて、次第4「今後のスケジュール」について事務局より説明いただきたい。</p>
<p>事務局</p>	<p>資料4「審議会開催スケジュール」について説明する。</p> <p>小委員会での審議は本日で終結し、次回は審議会を開催する。5月25日(月)の第3回審議会では、小委員会での審議結果の報告と基本構想の草案について検討いただく予定である。</p> <p>6月29日(月)の第4回審議会では、第3回審議会での議論を踏まえ、基本構想の答申案を検討し、決定する。</p> <p>最終回の7月29日(月)の第5回基本構想審議会では、審議会会長より区長に対して答申をいただく予定である。</p> <p>ご説明は以上である。</p>
<p>事務局 委員</p>	<p>[次回案内・追加意見シート案内]</p> <p>行政の横断、横串の必要性は以前から指摘されているが、実施に結び付いていない現状がある。横串の取組が必要というところで終わらずに、どういうふうに横串を刺していくのかを具体的に見えるようにしていただきたい。</p>
<p>事務局</p>	<p>DXも町会、協働の話も、すべての分野に関わる横串の課題である。</p> <p>基本構想そのものでは、まず「どんなまちを目指すのか」という大きな方向性を議論し、決めていく。その後、行政運営計画の中で具体的方法を検討する際に、横串の連携についてもより具体的に見えてくると考える。</p>
<p>委員長</p>	<p>[閉会]</p>